

土木學會長

京都帝國大學名譽教授
正三位勳一等工學博士 田邊朔郎氏

京大の工學部で博士の訓黨をうけた多數の後進も皆夫々社會の樞要な位置を占めてゐる今日、博士を東京に迎へて土木學會長に仰ぐ事は最も快心の美舉である。

田邊朔郎博士は東京の生れで、明治十六年に東京帝國大學に業を了へ、其後北海道鐵道建設部長として十勝平原の鐵道建設に従事されたが、博士が工事技術上に貢獻された最も著名なものは琵琶湖疏水工事と之に關連した我國最初の水力發電工事である。

○

疏水工事は博士が二十一歳の時に京都府知事北垣國道氏に知られて工事の計劃を立てたものである。其の起工式を舉げた明治十八年は博士が二十六歳の血氣盛であつた。五年後には實に我國の劃時代的新文明に依る工事が完成されたのである。京都と云ふ舊文明の眞唯中へ此の驚異すべき工事技術を展開されて忽ち日本國中の話題になつたものも當然の事である。

當時の日本國內には相當の工事が各方面に起工されてをつたけれど、社會一般から認めらるゝ事疏水工事に及ぶものはなかつた。青年田邊朔郎氏の努力もさる事ながら、時と處を得たる田邊氏の幸運も大なりと云はねばならぬ。此工事が竣ると北垣知事の愛嬢靜子氏と目出度く結婚された。其後の田邊博士の生活は總てが好運の連続であつた京大の教授として永い平和が続いた。

○

博士の幸運は凝つてまた豊かな趣味となつた、最も異とすべきは琴に堪能なる事で従妹の三宅花岡女史が琴の押手は日本一と折紙をつけられたと云ふ事である。其他書に良く、詩に良く、歌に良く、また技術的には石を愛して工事關係の石を多數蒐め自ら百石齋と號される。

○

今日の工事から見れば琵琶湖疏水工事の規模はもさより微々たるものであつたが、我國最初の難工事であり、然も工事設備に輕便軌條やトロツコを用ひ、電話まで架設したのであるから随分思ひ切つた新進ぶりである。



○

疏水工事起工後四年目に博士が隧道内の爆煙の中で決心した事は當時米國のコロラドで漸く成功したと云はれる 150 馬力の水力發電所の視察である。

○

明治二十一年十月出發、二十二年一月歸朝した其短い旅程の中で疏水を水力發電に利用するの立案をして直に工事に着手されたのである、二十三年四月畏くも 兩陛下の鳳輦を疏水堤に迎へて盛大なる竣工式は舉行された新聞紙は一齊に博士の功績を書きたて、當時博士の得意思ふべしである。

○

然も之は博士が幸運の花やかなる一面の觀であつて、工事上に對する苦心慘愴の努力は世人に餘り知られない、長等山トンネル工事や、犠牲者に對する博士の同情やそれは又他日に譲る事とする。

○

田邊博士の著述は例の土木のポケットブックが最も實用され又最も廣く行き渡つてゐる其他トンネル、明治工業史の鐵道編なきもあつた。あの趣味に富んだ博士が特に技術者の逃げたがるトンネル工事に深く研究を有せらるゝは面白い事である。